

江戸の想像力～ 闇と化かし～

見えないものを感じる力
共感力をテーマに

第九回

江戸に幸福力を学ぶ人情噺の会
(旧久松町倶楽部)

蘊蓄齋ひげ丸

はじめに

- **新しい江戸幸、はじめります。**
 - 江戸に幸福力を学ぶ、テーマは幅広く捉えてゆきたいと考えてます。
 - 落語会から広がる、和の魅力も探りたいと思ってます。
 - いろいろなところに、**お出かけ**もしたいです。
 - ということで、
 - お出かけ江戸幸、第一回目がありました
 - 江戸友禅の手ぬぐい作り、トライしてみました。

もちろん、落語もしっかり！

- ということで、今回は、**季節柄**、**落語**の**噺**のジャンルの中で、**代表的な怪談噺**を取り上げたいと考えました。
- でも、江戸幸としては、
- **怨霊**や**恨み**が渦巻く、**おどろおどろしい怪談**といよりは、どこか人情味がある、**化かし噺**にフォーカスしてみました。

おさらい、落語のジャンル

- 落とし噺、滑稽噺
(爆笑噺)
- 人情噺
- 怪談噺 ←
- 芝居噺
- 古典落語
- 新作落語
- 音曲噺 上方落語
(素噺) 江戸落語
- 廓噺
- 与太郎噺
- 長屋噺
- 幫間噺
- 盲人噺
- 夫婦噺
- 職人噺
- 親子噺
- 武家噺 などなど

ホクレア号の物語

- ポリネシアの人々が、本当にハワイにやってこれたのか？

- 人間の種の拡散は、偶然か目的的吗？

- 1976年のこと

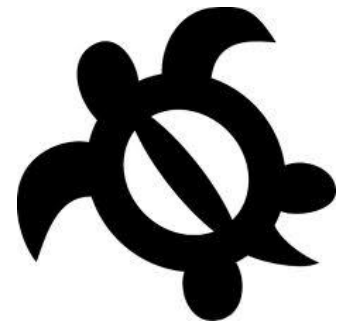


- **伝統航海術**で、当時の船の復元を行い、ハワイからタヒチへの実験航海を行った

- GPSもなく、西洋航海術（緯度経度、方位）でもなく、**天測（星）**による古代ポリネシアの人々の航海術が復元された

海がめは

- HONU（ホヌ）はハワイ語で、ウミガメのことで「幸運を運んでくれる生き物」として、丁寧に扱われています。
- 中国でも幸せを呼ぶ「守り神」
- 日本でも浦島太郎の話にもあるように「神の使い」と言われている。



神様の使いはいろいろ

- 伊勢神宮、天照大神と鶏
 - 天岩戸開きの時の鶏の長鳴きの古事より
- 山王さま（日枝神社）は猿
 - 縁と猿（エンという音読み）で、縁結び
- 伏見稻荷は狐
 - 食料をつかさどる、稲の育成を見守る神様のことをミケツカミといい、漢字で三狐神とあてていた：狐は古語で「ケツ」と呼ばれていた
 - 日本書紀には、ヤマトタケルノミコト（日本武尊）を助ける白狐が出てくる

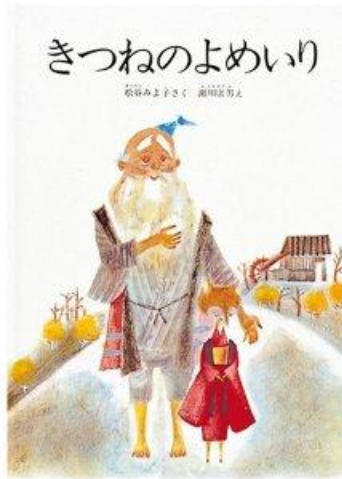
さて、**化かす**といえは、
キツネですね

キツネといえは、、、

狐や狸に化かされる お話はたくさん

洋の東西を問わず
(特に狐ですね)

狐のお話しの絵本はたくさん



- きつねのよめいり
- きつねとためきのばけくらべ
- 信太の狐
- きんいろのきつね
- きつねのホイディ (スリランカ)
- ほか多数



内山節さん著書 「日本人はなぜキツネにだまされなくな ったのか」講談社新書より



高橋源一郎氏

**日本人は、キツネにだまされる
能力を1965年を境に失ったと
思われる**

キツネにだまされる能力って？

古来日本人は、狐をはじめとする動物には、 人間以上の力を感じていた

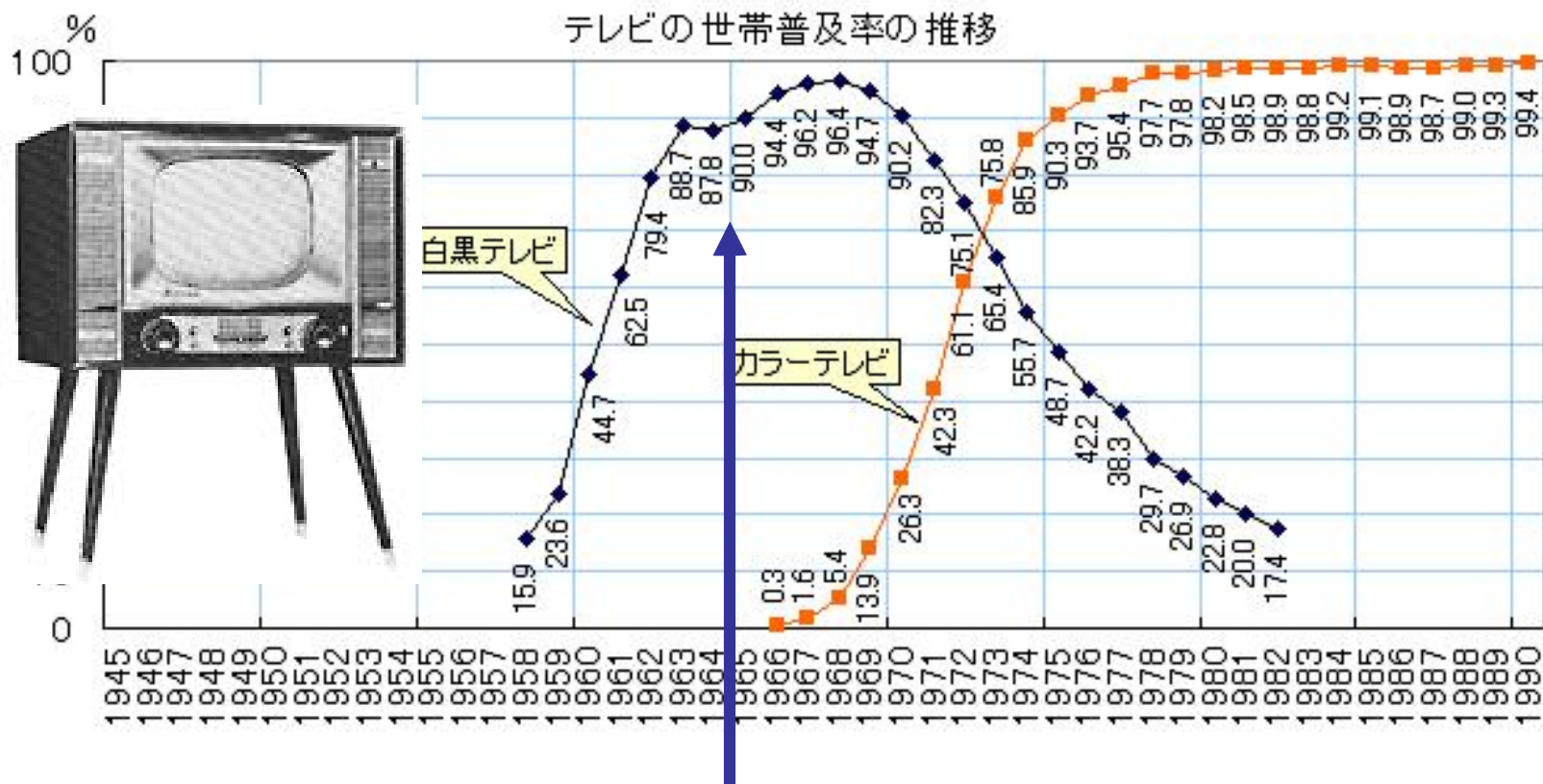
- 人々は自然を信頼していた
 - たとえ目に見えなくても、自分たちの生活圏のすぐ傍らに存在する「人知の及ばぬ世界」を感知していた
 - 人々は、自然から生きてゆく糧を手にする能力を持っていた
- そういう時代の人間と自然や動物とのコミュニケーションとして「狐に化かされる」ということがある
 - 狐に化かされたとしたか、解釈の仕様のないことが起こる

いつのころからか、我々は**眼に見えないもの**、**科学的に証明できないもの**の**存在価値を認識する能力を失ったのではないか？**

それが、**1965年説**

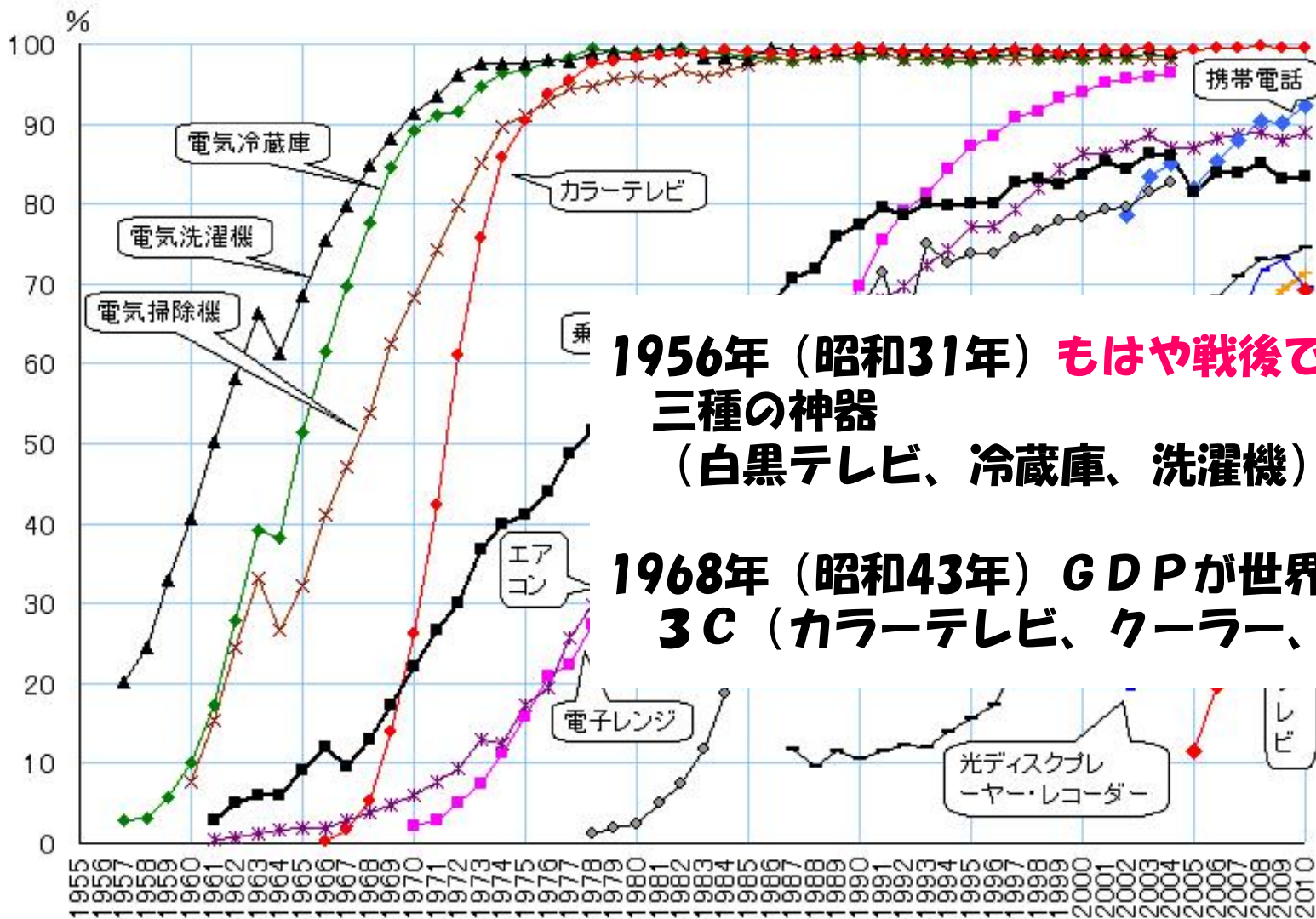
家電製品の普及は、いつごろ？

白黒テレビからカラーテレビへ



1965年（s40）：白黒テレビの世帯普及率90%

家電製品があたりまえになるのは 高度成長期前後（昭和30年代後半から）



**1956年（昭和31年）もはや戦後ではない
三種の神器
（白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機）**

**1968年（昭和43年）GDPが世界2位に
3C（カラーテレビ、クーラー、車）**

恐怖心と生命観、死生観

想像力の源？

ダイアローグインザダーク
くらやみ食堂

命につながる、想像力

- 幽霊、妖怪、化け物、怨霊、などが無数に蠢き、崇りがあり、取り憑きがあり。
- お守りや魔除けで身を守り、気持ちを支え、願をかけて縁起を担ぎ、信心を深め、
- 神様仏様に祈りを捧げ、盆には祖先をお迎えする。
- 我々の日常には、八百万の神がいて、草木塔に手を合わせ、時には狸や狐に化かされる。
- 私達の死生観や生命観も問われている？

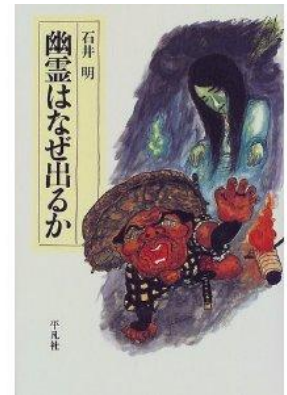
山川草木、悉皆成仏

- **一切衆生、悉有仏性：大般涅槃經**
 - すべて人間は仏性を持っている
- **草木国土、悉皆成仏**
- **もしくは、山川草木、悉皆成仏**
 - インドでは人間だけだったものが、**日本では自然界の生き物や、命のない無機物も、すべてのものに仏性があるとしている**
- **きっと、草木塔もその精神の現れの一つ**

「幽霊はなぜ出るか」平凡社・石井明著作を参考にして

幽霊はどんな人たち？

特に、落語に出てくる幽霊さんは
とても人間味がある
(我々の日常の鏡)



幽霊は恨みを晴らすためだけに この世に現れるのではない

- **心優しい女房の幽霊** ← 三年目
- **三味線を弾く幽霊** ← たちきれ
- **食べ物に執着する幽霊** ← お菊の幽霊
 - ひやめしい~、何で冷や飯なんだ。
 - お皿（腹）が減りました
- **かけごとが大好きな幽霊** ← へっつい
幽霊
 - 銭がなくても、決して足は出しません

幽霊の悲しみ・哀しみ

- 幽霊は年を取らない
- 幽霊の哀しみ
 - この世に現れる幽霊は幸せではない。かれらは生前の苦しみを持ち続けなければならない。
 - それを失えば、もはや幽霊ではなくなる。
 - 妄執に自らも苦しみながら、中空に迷い出でる
 - そして、目的を果たすと、この世での居場所がなくなる

応挙の幽霊

- 円山応挙筆の女の幽霊の掛け軸の買い手がつき、翌日の納品前に、お神酒を添えて画商が、一人飲んでしていると、その女幽霊が軸から出てきて、
- いっしょにどんちゃん。べろんべろん。
- 軸の中に帰ったはいいけれど、酔っ払ったまんまで、ひっくり返って寝ている。
- 「困ったなあ。明日までに酔いがさめるかしら」

野晒し（のざらし）

上方では「骨つり」
作者は、二代目林屋正蔵

楊貴妃と ハンカイ、もしくは張飛

明の小咄集「笑府」に元ネタがあるというのが定説

絶世の美女と、無骨な武将の対比

ご静聴、ありがとうございました。

蕪蓄斎ひげ丸

